

武蔵野年頭日曜聖書講筵

新春の讃美

―― 詩篇第65篇 ――

1978年1月8日

小池辰雄

鞍上人なく鞍下馬なし キリストと一如 沈黙から讃美に 義即恵 汝は覆いたもう 義と救
いの神 聖霊の滴り 中道 キリストという善福を持つ 祈り

【詩篇65】

うたのかみ

伶長にうたわしめたる歌ダビデの讃美なり

1 ああ神よさんびはシオンにて汝をまつ。

人はみまえにて誓をはたさん。

2 祈をききたもうものよ、

もろびと

諸人こそりて汝にきたらん。

3 不義のことば我にかてり。

なんじ我らのものもろの愆^{とが}をきよめたまわん。

4 汝にえらばれ汝にちかづけられて

大庭にすまう者はさいわいなり。

われらはなんじの家なんじの宮のきよき処の

めぐみにて飽^あことをえん。

5 われらが救のかみよ、

地と海とのもろもろの極^{はて}なるきわめて遠^{とお}ものの恃^{たの}とするなんじは公義^{ただしき}によりて畏^{おそ}るべきことをもて我らにこたえたまわん。

6 かみは大能をおび、

みちから

その権力によりてもろもろの山をかたくたたしめ、

7 海のひびき狂瀾^{おおなみ}のひびき、もろもろの民のかしがましきを鎮^{しず}めたまえり。8 されば極遠^{はて}にすめる人々もなんじのくさぐさの予兆^{しるし}をみておそる。なんじ朝夕のいづる処^{あしたゆうべ}をよろこび謳^{うた}わしめたもう。9 なんじ地にのぞみて漑^{みずそ}そぎ、

おおいに之をゆたかにしたまえり。

神のかわに水みちたり。

なんじ如此かくそなえをなして

穀物たなつものをかれらにあたえたまえり。

10 なんじたみぞ畝うねをおおいにうるおし、

畝をたいらかにし白雨むらさめにてこれをやわらかにし、

その萌芽もえいつを祝し、

11 また恩恵みめぐみをもて年の冕弁かんむりとしたまえり。

なんじの途みちには膏あぶらしたたれり。

12 その恩滴したたりは野の牧場まきをうるおし、

小山よつこはみな歓びにかこまる。

13 牧場はみな羊のむれを衣き、

もろもろの谷たなつものは穀物におおわれたり。

かれらは皆よろこびてよばわりまた謳うたう。

●鞍上人なく鞍下馬なし

明けましてお根ね（芽）でとうございます。

年賀状が七百ばかりきて、どうにもならなくて、お手あげで、だいぶ失礼してしまっていると思いますが。お年賀状をありがとうございます。もちろん、私はひとつひとつ心をこめて拝見しているわけですが、印刷だけの年賀状というのはやっぱりあまり響きませんでね、何か一言でも書いてないと。それで私もできるだけ書いているものですから、返事にとっても時間がかかって、いやはどうもお手あげというわけです。

1978年を迎えたわけですが、元日がちょうど日曜日であるので、本当は元日に集会をすべきであったと思いますけれども。まあ、静かに、皆さんも同じでしょうが、聖書を読むだけにしておきました。今日が第一回の集会というわけで、何にしようかと思ったんですが、I君の雑誌の表紙に、今月の聖句というので、

「11 また恩恵みめぐみをもて年の冕弁かんむりとしたまえり。なんじの途みちには膏あぶらしたたれり。」（詩

篇65・11）

とあったので、私はすぐ、ああこれにしようということで、65篇に決めたわけです。65篇というのは私は今日が初めてです。いまだに触れたことがない詩篇であったと思います。

今年は実はルターを書く年なので、やがてロマ書に入りますけれども、マルチン・ルターの「ロマ書講義」が彼の宗教改革の土台でもあるので、是非ルターとつくみたいと思っています。佐藤繁彦先生の「ルターの根本思想」という博士論文を、ちょうど大学の一年生の頃に読んで非常に感銘を受けまして、



「神学というのはこんな素晴らしいものか。無教会では神学をけなしているけれども、こんな情熱のこもった神学があるなら、やはり神学はすっかりやらなくてはいかん」

と、私はそう思った。そういう想い出もありまして、このルターとつくみだいというわけです。こないだから実は読んでいるんですけれども、実におもしろい。今日は年頭でこの65篇と一緒に学びたいと思います。

今年は午年^{うま}で——そこに馬の彫刻の置物がありますが、これはMさんからいただいたんですが——天馬という。「天馬空を往く」と言いますが。北村西望さんの——長崎の平和のあの大きな像を造った人で、今90歳くらいの方で、日本の第一級の彫刻家です——その「天馬」という彫刻を私は三越で見ました。素晴らしいですね。実はこの年賀状に、

「鞍上人なく鞍下馬^{あんじょう}なし。人馬^{ばんばく}驀進一如の相、今年の万事に在れかし」
という文句を年賀状に載せたんです。私は自分でこういう句にしてしまった。

「鞍上人なく鞍下馬なし」

という句は誰が言ったか知りませんが、どこかで私は読んだような気がするが、思い出せない。鞍の上に人がない。馬が走っているときに、騎手を意識しない。競馬でもおそらくそうでしょうね。乗っている方が下に馬がないかの如くに、空を行くような気持。これが本当の呼吸が一つになっている一如の姿である。なにも馬に限らない。やることなすことみな相手と一つとなる。

●キリストと一如

いつも言っているとおりの、この

「一如」

という言葉が、今私は一番好きな言葉かもしれません。もう信仰の境地は一如です。

「南無キリストと言え、キリストと一如の境地にいついかなるときでも即、入れ
る」

ということが本当の祈りの極意だろうと思います。もうそうなったら、行き詰まりを知らんわけです。どんなに悲しいときも、どんなに行き詰まっているときでも、どんなに問題があるときでも、どんなに人にけなされているときでも、何と思われようと、もうキリストと一如ということ。どこに問題が他にあるんですか。

この人馬一如ということが、主我一如——主と我とが一如——ということです。「我」は
いわゆる我^がではありませんけれども。

「主我一如」

ということ。しかし、「主我」という言葉は困る言葉だよ。主我的というと、よくない言葉なんだ。いわゆる主我的というのは、自分を主にしているというので、そういう意味とは



違いますから、間違わないように。「主」は救い主ですから。救い主とこの罪びとの我なる者が一如ということです。一如になつてくださっているのです、こつちで一如になるのではない。キリストの方から一如にしてください。

「少し修養して、少し聖書を勉強して、もつと人を愛して、それから一如になりましょう」

なんて言つたら、何年たつてもダメだね、僕なんか。しょうがない野郎だから、キリストが無条件に一如にしてください。これが無条件の絶対恩寵の世界です。そうするとえいらくことに、力が出てくる。ありがたいでしょうがないから。

「ありがたい」

という言葉は本当にありがたい言葉です。

「有り難し^{かた}」

という。普通には「有ること難し」なんです。福音の他に本当にありがたいところはないんですよ。福音は正に「有ること難し」です。普通はもう不可能なんです。有ること不可能なんです。不可能を可能にしているのがこの福音です。

太陽の光は絶対的な恩寵の光でしょ。そのようにキリストは正にそうなんです。何ものも貫いて照つてしまう。浸透してしまふ。

太陽でまた思ひ出すんだけど、日本の国旗は太陽であります。どうして日本人はこの国旗を尊重しないかね。「お前は日本人か」と言いたくなるね。私は正月三日間、国旗を掲げておいた。日本中でそんなことをしている人がいるかい知らないか知らんよ。私は明治の人間だからではない。象徴として掲げた。本当は一年中かけておけばいい。官庁には一年中かかっているね、あれは結構だよ、本当の意味なら。日本の国旗を見たら、何とも言えない明るい素晴らしい気持ちにならなかったら、日本人じゃないね。また私は明日、学校の始業式のときに生徒にはつきり言つてやる。

そういう躍進の年です。今年は躍進、驀進、猛進の年。キリストに一如にしてくださいまして、躍進、猛進する。

「我がキリストか、キリストが我が」

という。そういう言葉は非常に危険な言葉ですけれども、絶対恩寵の世界では言える。

さきほど、「立ち帰れ」の讃美歌を歌いましたが、我々が立ち帰るよりも、神さまは立ち帰らしめた。

私は、キリストに帰る人には無条件に握手をします。過去なんかは私は何も問いません。私のところからいろんな事情で行った人がたくさんいる。私にも責任があるでしょう。けれども、お互いに人間的なことを考えていたら、いつまでたつても始まらない。私はひたすらお怨んでいません。時々、祈っています。そうすると、

「先生の本を十巻全部申込みます」



なんて言ってくる人がある。それも出て行った人だ。聖霊の世界で怨みごとを持っていたらば、神さまとの交わりは本式にならない。

●沈黙から讃美に

では、詩篇に入りましょう。これはなかなか原文は読みにくい詩篇なんです。日本語の訳はこういうようにうまく訳してしまっただけだと思つて、感心しているんだけど。大したもんだ。ルターさんも大したもんだ、訳を見てみると。かなり言葉の構造を超越したような訳です。もつとも、私はヘブライ語が非常にできるわけではないから、そういうこともあり得るということもあるでしょうけれども。

うたのかみ
伶長にうたわしめたる歌ダビデの讃美なり

と。題して、

「新春の讃美」

と私はしたわけです。新しき春。この詩篇は、内容をみると、本当に新しき春です。我々にはちよつとまだ早春でね、この内容は日本の風土ではピンとこないけれども。

「新しい」はもちろん常に質的に新しくなっている、古びない新しさです。この新春という気持は、年々歳々、質的にどしどし新しくなってくる。

「また古くなつたが、仕方がない、繰り返しまた新しくしよう」

なんていうのは普通の新年だけれども。そうでなくて、私たちは前進してやまないところの、質的にいよいよ新しくなつていこうというわけです。

「ああ神よさんびはシオンにて汝をまつ。人はみまえにて誓をはたさん。」

この「待つ」という字を、どうしてこう訳してしまつたかと思うんだけど、これは

「沈黙」

という字なんです。ルターさんは、

「神よ、人々はシオンに向かつて静かに汝を讃める」

と。「静けさにおいて讃める」というようなことに、ルターは「沈黙」と訳した。学者のいろんな説を言いだしたらきりがなからやめますけれども、ここのところはいろんな読み方をしている。直訳すると、

「汝に対して沈黙、讃美、神よ」

と。これはみんな名詞なんです。沈黙から讃美に変わる。

「汝に対して黙していましたが、讃美に変わりましたよ、神さま」

というのが本当の気持ではないですかね。

「今まで黙っていましたけど、今度こそ讃美ですよ。冬の静けさから春の歌に変わるのです」

というわけです。



「シオン」はやはりエルサレムの神殿中心の面がこの中にも表れています。

「汝に対して誓いが果たされます」

と、「果たされないではいられません」という受け身の形で書いてある。「誓いは果たされます」という、かなり強い動詞の使い方をしている。

「祈り誓ったことはあなたに対して果たされるわけです」

と。「果たす」という字はもともと「支払う」という字です。

●義即恵

2 祈をききたもうものよ、

「シヨームール テツヒラー」「祈りを聞き給う者よ」という非常にはつきりした言葉です。現在分詞を名詞的に使つてある。

諸人^{もろびと}こぞりて汝にきたらん。

と。いい訳ですね。「諸人」という字は「バーサル」「肉」という字です。生きとし生けるもの。自然的生命のことを「バーサル」という。

「すべての生けるものが、すべての肉があなたに向かってやって来ます」

と。正に私たちの祈り以上の祈りを聞いてくださる。聞かれざる祈りが最も深く聞かれている。それくらい、ず太い信仰にならなければダメですよ。

「神さまはちつとも聞いてくれない。しょうがないな。もういい加減に信仰をよそ

うかな」

なんて、大体、それでやめていくのがあるんだよね。それを御利益信仰という。御利益がなければやめてしまう。結果はどうでもいいんだ、人間の側の結果は。結果はどうでもいい。結果を思わない。祈りの根源現実では聞かれている。

「汝、祈りたることは聞かれたりとせよ」

というキリストの言葉は正に、その

「根源現実」

でとらえないとダメです。それはもちろんしばしば現象します。現象しないからといって、どうのこうのと思つたらダメです。我々はいつかは死にますよ。誰だつて死にたくはないけれども、

「いつまでも地上で永遠に生かしてください」

なんていう祈りは聞かれないよ、そんな祈りをしたつて。だから私は、

「ドラマチックだ」

と言うんです。こちら側は、遠慮なく祈っていいですよ、祈りたいことは。それは悲願です。「悲願」という言葉は必ずしも仏教的にはそういう言葉でないけれども。今、私が使うときこの「悲願」というのはこちら側からの祈りを



「悲願」

と言っておきます。

「本願」

に對するものです。しょつちゅう、本願の祈りが祈られているなんてことは、人間には言えないですよ。けれども、偽りなく祈っていれば、それが本願に覆われている。それが聞かれようが聞かれまいが、一番深い意味においては聞かれているということなのです。

「ノー リーズン ホワイ」(何故かわからない)という。

「なぜだか分かりません。けれども、あなたのなまることが善であり義^{ただ}しい」と。このあいだ、ルターのもので読んでいたら、ルターははつきりそう言っている。

「人間の側の何かが義^{ただ}しいということではない。義しいのは神さまの側^{ただ}だけだ」

と。義というのは、義は神さまだけが持っている。だからありがたくなるんです、義が。ルターが始め考えていたように、

「よし、神さまの前に私も義となろう」

として、義となつたような顔していたのがパウロです。ところが、

「それは大間違いだ」

と気がついた。こんな義だったら、苦しくてしょうがない。誰か耐え得んやと。義は神さまだけなんです。御意が義なんだ、どんなにそれが自分に不合理にみえても。

これから大いに伝道しようという時に藤井先生の奥さんが仆れてしまった。そしたら、内村先生が、

「神を義とせよ」

と言った。この一言に藤井先生は豁然とした。これが義なんです。残酷な義なんです。残酷な義だけれども、残酷でないものがある。それを本当に受けとる人は、必ずこの義が恵みの力として動いていくんです。

「義即恵」

です。この中にも「義」という字が出てくる。それをワイザーという詩篇の註解者が「義」を、
「ハイル」「救い」
という字に訳してある。これはイザヤ書では正に、

「義がまた救いである」

という。第二イザヤで申し上げているとおりです。第三イザヤでもそうです。まあ、イザヤ書というのは素晴らしいところだ。文語訳のイザヤ書を自分でノート一冊作りなさいよ、ずっと詩のように。そのくらいの情熱を持たなくてはね。イザヤ書に限りませんが、あなたの方の好きなのを。

そういうのが



「祈りを聞きたもう
というんです。」

「『祈ったことは何でも聞かれる』か。よし、それでは……」
なんて言ってやったら、それは御利益信仰であぶない。聖書というのは困るよね、文字面からは、ある意味において躓きの石だから。

「祈りをききたもうものよ、誰でもがあなたのところに来れるんです
ということですよ。」

● 汝は覆いたもう

³ 不義のことば我にかてり。

「不義のことば」という。「ことば」「ダーバール」という字は、「言葉」でもあり、また「事柄」でもある。不義の事柄および言葉——言行、業、事柄、マター——それが強かった。これは複数です。

「不義の言葉や事柄が私より強かった。私をやっつけた」

と。要するにこれは、

「どうにもならん」

ということですよ。

「私はどうにもならんやつです、罪びとです」

ということ。

なんじ我らのものもの^{とが}の愆をきよめたまわん。

「なんじ」「アッター」という字が特に使っている。「ペカッペレーム」という字は「カバーする」という字で、「きよめる」ではない。

「汝は覆^{おお}いたもう」

というんです。

「罪を覆われたる者は幸いなるかな」

という詩篇32篇と同じ角度の言葉です。覆われている。

「愛はすべての罪を覆う。愛は諸々の罪を覆う」

という。これはペテロ書の言葉でもあるし、また箴言の中にも出てくる。それを覆い隠してしまつて、問わないという。

「私たちはしょうがないやつなんだが、あなたは私たちの愆^{とが}を全部、かぶせてしまいました。見えなくしてしまいました」

と。キリストの贖罪は——「愛は全ての罪を覆う」というのは、かばうというのは、ただそれを肯定しているわけではないけれども——包んで溶かしてしまう。

⁴ 汝にえらばれ汝にちかづけられて大庭にすまう者はさいわいなり。



「幸いなるかな」「アッシュレー」という言葉が一番先に出てくる。

「幸いなるかな、汝が選び、また汝が近づけた者は。汝の大庭にその人は住まわせられる」

と。神殿の庭に住まうようになる。そういう者は幸いである。大庭なんて言うよりも、我々には、新約的には

「汝の在^{いま}したもうところ」

だよ。選ばれ、近づけられ、汝の在^{いま}したもうところに住まわせられる者。神が近いという、

「神の身近感^{きんきん}は極めて大事だ」

ということとはヒルティがよく言っていましたけれども。キリストの身近感。

「インマヌエル」「神我らと共に」

という、これが「近き」の意味ですね。内在、一如の内在は一番大事ですけれども、また「近い」という意識ももちろん結構なことです。人間の現実というものは、そういった有機体的構造ですから、お互いに近づいて相まみえることがまた楽しいことである。それが本当にまみえているうちに、

「我が汝か、汝が我か」

なんていうわけになつてしまう。

これは旧約ですから、もちろん神殿のことが言われているんですけども。お宮参りです。まあ、ヨーロッパへ行こうが、日本であろうが、どこであろうと、とにかく神社・仏閣・教会が至るところにあるよな。あれはひとつの象徴です。もちろん、その中に入つて、その気持になることは結構なことですけども。しかし、至るところこれ神殿である。

「大空は即ち屋根、青草は即ち畳である。これが私の教会である」

なんて、内村鑑三先生が有名な文章で書いているけれども、そういうわけです。

●義と救いの神

われらはなんじの家なんじの宮のきよき処のめぐみにて飽^あくことをえん。

「めぐみ」という字は

「トープ」

という字が使つてあるので、これは「ヘセッド」でない。「トープ」というのはむしろ

「善福」

とでも訳したい。「よいかな」と言うときに、「トープ」という言葉を使う。善福、恵み。

さつき出てきた

「アッシュレー」「幸いなるかな」

は恵まれたる

「恵福」



と言ってもいいわけです。ドイツ語でいうと、これは「ゼーリツヒ」です。「グルユックリッヒ」ではない。ヒルティがああ「幸福論」のときに、一般に「グルユック」「幸せ」という字を使ったけれども、ヒルティが言っているのは、そういう「グルユック」ではなく、本当は「ゼーリツヒカイト」なんです。恵福の方です。

なにも「幸」という字がわるいのではない。「幸い」という字は結構なんです。たくさん「幸」という字の名前のかたがいらつしやるけれども。なにも私は字にこだわっているのではない。

ドイツ語の聖書にも「グルユック」という字はほとんど出てこない。みんなこの「ゼーリツヒ」という字です。名詞でいうと

「ゼーゲン」「祝福、恵み」

です。

「なんじの家の善福で我々は満たされる。またなんじの宮の聖さで我々は満たされる」

ということ。

5 われらが救いのかみよ、

地と海とのもろもろの極なるきわめて遠ものの恃とするなんじは
公義によりて畏るべきことをもて我らにこたえたまわん。

これはむずかしいね。

「公義によりて畏るべきことをもて」

と、意味が通ずるように言ってしまったんだけど。これは訳し方の、みなお手上げのところですよ。一番先に

「恐れ畏む」

という――あるときは「恐がる」という字ですけども――その名詞的な複数の形が出てくる。畏るべきこと、義において。「義における畏るべきこと」というのが冒頭に出てくる。

「義における畏るべきこと、汝はこたえたもう」

と。いわゆる未完了形が使ってあっても、私は「であろう」なんていう訳し方をしない。直訳すると、

「義における畏るべきこと、汝はこたえたもう。」

おお、我らの救いの神よ、地の諸々のはての信頼、また遠くの海の」

と書いてある。これはそういう妙な節です。それを、意味はこういうようにしてしまったんだ。大体、そういうことでしょうけれどもね。

絶対的な使い方をしているから、これはやはり、

「汝はこたえたもう、義の畏るべきことをもって」

ということでしょうね。「もって」なんていう前置詞も何もないんだ。義の畏るべきことが



汝の答えたもう内容である。義の畏るべきことをもって汝は答えたもうと。

「汝の義はなんと畏るべきものではないか。それがあなたのなさる答である。だから、地ののはて、また海のはてから汝を頼むのだ」

と。即ち、「信頼する」という言葉があるのは注目する必要がある。それは「救いの神よ」と言っているでしょ。

「義の畏るべきことをなさるあなたは救いの神なんだ」

と。こうなってくると、預言者の気持がやはりそこに出ている。義と救が。

「義の畏るべきことをなさる神が本当の救いの神なんだ」

と。「義と恵み」がカバーしたところの同じ意味を持っている。同義語である。だから、信頼する。あなたに信頼すると。

「地の諸々のはての、一切のものの信頼するところの救いの神」

ということ。もちろん、我々は新約の光ではつきりそう読めるわけです。旧約における義にはかなり審判の面が強いところはもちろんあります。それは敵を審くという角度からの意味ですけども。しかし、また我々も審かれるけれども、それを覆うという。やはり、神さまの義が救いに向かっている、それが神の義しさである。どこまでも、神の御意の義の中に私たちを入れようとする本願の気持を受けとる角度が大事だと思います。

●聖霊の滴り

6 かみは全能をおび、

みちから

その権力によりてもろもろの山をかたぐたしめ、

7 海のひびき狂瀾のひびき、

おおなみ

もろもろの民のかしがましきを鎮めたまえり。

しず

これはほとんどこの通りに読めます。自然界の大波も、人間界の大騒ぎもみんな鎮めたもう。これは「鎮めたもう者」と、ほとんど名詞的に使っている。

8 されば極遠にすめる人々もなんじのくさぐさの予兆をみておそる。

しるし

なんじ朝夕のいづる処をよろこび謳わしめたもう。

あしたゆうべ

「朝夕のいづる処」がちよつとやつかいなんです。

「極遠にすめる人々もなんじのくさぐさの予兆をみて」

はて

しるし

と。それは結構です。「みて」という字はなくて、「なんじのくさぐさの予兆のゆえに」ですけども。原因理由を表す「メー」という字です。直訳すると、

「朝夕のいづる処のもの。汝はこれを叫ばしめる、歓呼の声をあげさせる」

と。ルターさんは何と訳しているかな。ただ「朝にも夕べにも」と訳してあるな。要するに、「朝にも夕べにも歓び歌わしめる。それはあなたの不思議なわざのゆえだ」ということです。



9 なんじ地にのぞみて澆^{みずそ}そぎ、おおいに之をゆたかにしたまえり。
神のかわに水みちたり。

なんじ如此^{かく}そなえをなして穀物^{たなつもの}をかれらにあたえたまえり。

いかにも豊かな慈雨が降つてきて、それでもつてまた泉も湧いて、春のきざし、先の収穫を歌おうとしているところです。

10 なんじ吠^{たみで}をおおいにうるおし、

畝^{うね}をたいらかにし白雨^{むらさめ}にてこれをやわからにし、その萌芽^{もえいづ}を祝し、

「白雨^{むらさめ}」とか「萌芽^{もえいづ}る」とかいうような言い方はよく出てくる。申命記32章のモーゼの歌にも出てくる。

11 また恩恵^{みめぐみ}をもて年の晁^{かんむり}弁^{あひら}としたまえり。

なんじの途^{みち}には膏^{あぶら}したたれり。

これがこの詩篇の今日学ぶところの、中心と言つてはおかしいけれども、大事な節のひとつです。「なんじは晁^{かんむり}弁^{あひら}としたもう」と書いてある。直訳すると、きつきの「汝の善福の年」という、汝の恵みの年をかんむりしたと。「年を恵みをもて」というような訳し方をしてますけれども、

「汝の恵みの年をかんむりした」

ということですが。私たちに善福の年をかぶらせてくださる。新年を迎えたことは、善福の年をかぶらされたことになる。

「なんじの途^{みち}」は航跡、歩いた跡という字です。なんじの途は膏^{あぶら}でしたたる。あぶらしたたる。本当は、あぶらでもありはしない。

「なんじの途はあぶらしたたる」

というように言い方をしている。あぶらしたたるのですから、この「あぶら」という字は「豊か」という字にもなる。私たちにとつては、「あぶらしたたる」は油滴を被るわけです。これは御霊の油滴です。私たちは、善福を被らされて、そして霊の油滴、御霊の油滴がしたたつて、いよいよ霊的に豊かにされていく。

12 その恩滴^{したたり}は野の牧場^{まき}をうるおし、小山はみな歡^{よろこ}びにかこまる。

13 牧場はみな羊のむれを衣^き、もろもろの谷は穀物^{たなつもの}におおわれたり。

かれらは皆よろこびてよばわりまた謳^{うた}う。

農業も牧畜も全部これは栄える。これはイスラエルに行つて少し生活すれば、こういう句がよく分かるでしょう。そういった滴り。人間におきましては、新約からは正に聖霊の滴りです。

●中道

この詩篇を今は言葉の上で多少分かつたわけですが、そういった言葉の上で大体



分かってから、繰り返して読むと、非常に豊かな、そしてしかも渾然と福音を持ったところの歌であることに気がついたわけです。即ち、神さまは私たちの不義を、罪を覆ってしまつて、近づけ、そして一如の世界に持つていこうという恩寵の事態をまつさきに歌っている。だから、今まで黙していたけれども、これは讃美に変わる。そして、神さまが非常に力強い神であつて——その「大能」とか「力」ということが出ているでしょ——山川草木を本当に創造したまた治めているところの神である。また、その御業は、実に不思議な御業をなしたもう。それは自然界に対しても鎮めてしまふし、人間界の騒ぎも鎮めるところの力を持つておられる。

「静まりて我の神たることを知れ」

と、詩篇46篇にもありましたね。そして、新しき年を、善福をもつてかむらせてくださつて、私たちに聖霊の油を滴らしながら進んでくださる。というような意に私たちはこの詩篇65篇をこの年頭に読まざるを得ないわけです。

ところが、日本や世界の現実はこの正反対です。何だい、デノミネーションかい。私は経済のことは知らないけれども、だいぶ怪しくなってきた。いわゆる人間中心の文化文明がゆきすぎた。

いや、何と言つても、キリストの言葉は素晴らしいね。あの山上の垂訓の中の、

「²⁶空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。……³¹さらば何を

食ひ、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。」(マタイ6・26・31)

と。あのキリストの言は、

「自然の法則と一緒になれ。神さまの法則の下、また自然界と同じように。自然界

はやはり法則の中にいる。天然の法則を破るようなことをすると、ろくなことにならない」

ということが、含まれている。人間の知恵ばかり先にたつて、しかも、その知恵が欲とからんでいるから、何でも儲けよう儲けようとして、今度は逆に困る。売ろう売ろうとすれば本当の商売にならない。これは政治の話でも何でもありませんけれども。

結局、そういった法則に従つて、順応して歩くのは本当の中道だね。支那に『中庸』という本があるが、やはり、古典で言われているところの事柄は「中」ですね、右でも左でもない本当のまん中です。私たちの福音も正にこの中道なんです。中道というのは中性とは違うよ。ニュートラルな、即ち男でも女でもないなんというのではない。右も左もちやんと持っている。右の良さも左の良さも持っている。本当の「中」は両方ともダメにしてしまつていのではない。本当の「中」は——「中」というのはまん中で——一切の周辺を持つていいる。一切の周辺を持つて、そして中である。もの凄い動的な中なんです。

コマと同じです。グルグル回転して一本足で立っている。回転してなければダメだよ、



この「中」は。コマがよく回っている時はじつとしているね。あれは静中の動というんだ。コマが回っているのは静かだけれども、もの凄い動なんです。あれが静動一如ということ。あれがフラフラしてくると倒れてしまつてダメだ。本当に回転している姿は静かなんだ。馬鹿面^{ぶかづら}しているけれども、大愚即ち大賢というようなわけだ。

そういう「中道」というところを行く。それぞれイズムには、右なる善さも左なる善さも、在り方にはそれぞれの善さがある。けれども、私たちはどれにも囚われない。全部ちゃんと掌握して進んでいく。これが「黄金中道」——黄金中道というのはどういうのか知らないけれども。幾何学の方では少し違うけれども——黄金中道式な中道です。これが福音の安けき、平安です。福音的平安というのはそのような動的な中道の世界です。

キリストというひとは宇宙的ですよ。こないだ、私はちよつと用があつて、キリスト新聞社に行った。そして、Kさんとしやべつた。彼が言うのに、

「いろんな教派があつて、何のかんのとくだらないことを新聞社に言つてきますよ。」

どうしてこれを載せないだの、また、なぜ載せただのと

と。みんなセクショナリズムで、教派根性、またパリサイ根性なんだ。だから、私は彼に言つたよ、

「それは要するにパリサイだ。キリストは宇宙的なんだから、あなたは、そんなことを何と言われようと、心配なしにやりなさいよ」

と。そういう宇宙的なものがちゃんとしたもの凄い中心を持っている。神一切という、キリストは中心を持っている。私たちは、キリスト一切という中心を持っている。それではその中心はどこなんですかと。「同円異中心」という言葉がある。同じ円で中心が異^{ちが}う。どこでも中心になる。これは円ではダメなんです、球でない。本当は同球なんだ。どこでもこれは中心になる。同球異中心。あなた方は一人ひとりみんなちがう。けれども、一人ひとりがキリストを中心にしていて、それがその人を中心に、何だか知らんけれども、動きだす。そして、それが全部、

「それでは私の円とお前の円は、私の球とお前の球はちがうか」

というと、実は一つだった。キリストが私たち千差万別の一人ひとりの中に入つていらつしやると、同球異中心的な現象が起きる。セクショナリズムにならない。

●キリストという善福を持つ

何が善福ですか、世界中、こんな問題だらけの年を迎えてね。善福は地上にないんだ。天界にある。もうそこから始まらない。経済のことであろうと、政治のことであろうと、何であろうと。宗教を何も政治と一緒にしろと言うのではない。経済を宗教と何か関係づけようというのではない。経済を営む人、政治をする人、学問をする人、事業をする人、医療をなす人、何であろうとも、その奥に善福を持たなかつたら、奥にキリストという善



福を持たなかったら、どれも本当にはならない。それを持てば、それぞれのことをしながら、同円異中心的に、

「ああそれで良かったな」

ということになっていく。地上ではほとんど望めませんよ。ほとんど望めませんが、しかしながら、それは本当に真理です。それでは、現実はどうしてくれるか。いろいろの問題をいろいろな角度から研究して大いにやることはもちろん結構なことです。しなくてはなりません。けれども、いつも問われなければならないのは、その奥のその人間そのものです。物価が上がったのも、それはなるほど現象的な石油ショック以来でしょう。あれが世界の秩序をひっくり返した。あれも、もう少し儲けなければということ、どういう因子がどう働いたか知らんけれども、結局、石油を独占しているやつらの欲がそういうようにしてしまった。そしてみんな狂ってきた。すべては結局、人間の心の問題に帰している。だから、

「無の実存」

が大事だと言う。本当に売ろうという商売人はまずただで与えたい。この無の実存というの

「無即無限無量」

ということだから、どう考えたって、これは真理だと思う。

地上は問題だらけだ。行き詰まりだ。どうなるか分からん。不安である。けれども、その中であって、

「エホバはわが牧者なり。われ乏しきことなし」

という。このエホバ、キリストを持つという善福。わがうちに善福あり。

「わがうちなるこの善福を何をもつてくつがえすことができるか」

と。

「恵福なるかな、善福を持つ者よ」

と。その善福の質は何か。膏あぶらがしたたっている、聖霊が泉しているところの善福であります。正に霊的活泉です。結局、私たち自身が霊的生命を滴らせているような、泉しているような、そういったことが本当の善福の姿である。行き詰まりをしらない。これを本当にやってくれたのは——キリストはもちろん言うまでもないけれども——パウロさんです。あれだけの行き詰まり、あれだけの艱難に遭って、

「喜べ、喜べ」

となぜ言えるんですか。しまいには殉教の死を遂げて天界に進んでいく。この熾んなる、死んでも死なないところの生命は、もう詩篇65篇を突き抜けてしまう。いや、実に詩篇65篇がそのことを預言して讃美しているようなわけです。だから、新春の讃美と言いたい。

いいですか、皆さん。人間の側がどうであろうと、人がどうであろうと、自分がどうで



あろうと、いいですよ、そんなことは。決してそれでもってへこたれない。それはもうひとつ奥の世界を持っているから。我々の信仰なんていうものは、いわゆる

「我々の信仰」

でも何でもない。何もありませんと。それが私が

「無者」

という話なんです。無者なんて言うのと、何か情けないように思うけれども、冗談じゃないよ。いいですね。そういうことで、天馬にまけず躍進驀進して行きます。聖霊の翼で天翔ける^{あまか}。どんなことがあっても、絶対に愚痴は言わん。

私は躓きの石みたな人間でよかったよ。私の集会に来て、本当に鍛えられていけば、もうどこへ行っても大丈夫です。そのかわり、私自身に躓いたやつはみんなダメになる。私のはもの凄い天地を貫くところのドラマチックな構造を持っています。

だから、「組織神学」なんてものはけしからんと思うから、絶対に「第三卷」『無の神学』1982年刊)で世界の神学界に私は戦いを挑むつもりです。時間があつたら、ドイツ語でも書くつもりです。キリストの宇宙的な、聖書そのもののドラマチックな生命というものは、そんな組織でなんか言えるものではないんです。

クリスマスの朝から晩までの録音を聞いて、京都の奥田君から感激の手紙が来た。私たちはいいよ、今度はローマ書とつくみながら進んで行く。何であろうと、第一級のもの^のを相手にしなさいよ、皆さん。

● 祈り

祈ります。

しのめ

東雲を呼びさまし、1978年の曙^{あけぼの}を来たらしめてくださった神さま。この最初の集会を特に今日は、1兄弟も姉妹も、またその他の新しくO君の集会からやって来た青年たちも交え、このような集会を持たしめられ、詩篇65篇をあなたが私たちに与えてくださって、このように魂からの讃美をなさしましたことを感謝いたします。

あなただけが幸いのみなものです。あなたを本当に私たちはいただき、うちに宿し、そして、あなたという御霊のキリストさまが私たちの中に膏^{あぶら}したもうて、この年はどんな嵐にも決して消えない灯火^{ともしび}となり、そして、どんな冷たい時にも、本当に太陽の光となり、私たちは行き詰まりを知らない人になりたいです。どうぞ、この老若男女、何も問いません。みな同じだとパウロが言いました。そのようにキリストを持つものは一切、その一人びとりののつぴきならない存在をもつて、主さま、あなたを証していくことができますように。
……

